

## 時を繋ぐ震災復興 ～環境リスクと共生していくために～

木谷 忍 東北大学大学院農学研究科

破壊された瓦礫の町で海に向かって深々と頭を下げる姿、原発事故で政府・東電に怒りをぶちまける姿、この被災民の際立つ態度の違いは、単に天災・人災という災害の“質”によるものだろうか。熊田(2005)は、市民がリスクの認識、評価、そしてリスクへの対応行動について納得できる自己決定の場から遠ざけられ、結果に対する自己責任領域の拡大を指摘する。池田(2004)は、不確実性の程度(生起確率の高低ではない)と望ましくない結果の市民間での一致性からリスクの対応戦略を捉えるが、原発のような自然リスクを増幅しかねない人工リスク(科学技術)に囲まれ、リスクの影響が変動拡大(市民の結果受容の不一致の拡大)する現在、最も必要とされる社会装置は、リスクコミュニケーションである。

このコミュニケーションの装置は、現世代の人達だけに与えられた特権ではない。サイレントマジョリティ(将来世代の人々)の声をいかに取り込むかという私たち現世代の想像力が問われる。現世代の一部エリートたちが、未来世代を含む圧倒的な数の人々の選択(自己決定)に関わる自己責任領域を奪い去り、人間思考に都合の良い形式モデルによる確率計算から安全基準を想定し、そしてこれほどの大震災は予想できなかったと詫びる。形式思考によって蓄えられてきた知識とそれに裏づけられた科学技術の脆弱さは、現世代(ラウドマイノリティ)が近視眼的に経済的豊かさを希求するが故に、平常時には顧みられることはない。海に向かって頭を下げる被災者の心情は、歴史の教えに従わずに大堤防に安住してしまった自責の念なのかもしれない。純粋な自然災害は、人間の心の中にあるのであって、私たちの精神の外にその根拠を求めることはできず、すべての苦しみは私たち自身の責任である。

ある知識は勇気を持って忘れ去る(unlearn)、ある構造物をあえて壊してしまう(unbuild)、時を繋いでいく地域社会(サイレントマジョリティとともに生きる社会)にとっては、今まさにこういった勇気が問われているのではないか。

熊田禎宣(2005)「植福の科学づくりに貢献する計画行政学」、計画行政 28 巻 3 号, 16 - 26.

池田三郎(2004)「リスク分析事始」、『リスク、環境および経済』, 33 - 45.